

1ページ5ポンドの文章とは

著者	武藤 哲郎
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	50
発行年	2018-03-16
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006566/



1 ページ 5 ポンドの文章とは

武藤 哲郎

2001年にロンドン大学で1年間国外研修を行った際、ジョン・サザランド先生が指導教官になってくださった。私の研究テーマは「ブッカー賞の選考方法」についてであった。当時の選考委員会を束ねていたマーティン・ゴフ氏を紹介してくださったのもサザランド先生である。ゴフ氏をオフィスに尋ねたとき彼はちょうどティーの時間で、イギリス人らしく格式を重んじて素晴らしいティーカップのわきにはこれも素晴らしい小皿に美味しそうなケーキが乗せられていた。2001年のショートリストに残ったのは、Ian McEwanの*Atonement*とPeter Careyの*True History of Kelly Gang*であった。私はマキューアンがブッカー賞を取るのではと言うと、ゴフ氏は帰り際にケアリーも可能性があるという意味深げにおっしゃった。後から考えてみて、何でも賭けの対象にするイギリス人であるから、ケアリーに賭けていればある程度のお金が儲かったのではないかと卑しい発想もしてみた。サザランド先生の研究室に行ってその話をすると先生は、笑いながら「マキューアンの文章が読めるなら1ページ5ポンド払ってもいい」とおっしゃった。マキューアンとも親交の深かったサザランド先生のその言葉が、今になって気になり始めたのである。

何故「1ページで5ポンド」なのか。パブに行くと1パイントのラーガーはだいたい5ポンド、マックやケンタのファーストフードもだいたい5ポンド。5ポンド紙幣はイギリスでは最も頻繁に使われる紙幣である。ビールを我慢してもランチを食べなくてもマキューアンの文章1ページを読みたいと思うのは、それほどサザランド先生が彼の文章に惹かれている証であろう。一体マキューアンの文章をどう形容したら良いのだろうか。

予備校に通っていた時（当時予備校の先生は下手な大学の教員よりも優秀であった）、ある現代国語の先生が川端康成の文章を「紙をスーッと剃刀で切るような文章」と評したのを記憶している。記憶しているということは、その言葉が二十歳前後の私を妙に納得させたのであろう。

今日本では文学離れが加速し、学生の間でも文字離れが顕著である。学生は文学書を読もうとせず、自らの言葉で自らの考えを書くのを嫌がる。日本の社会自体が文学をやっても何の役に立たないという風潮なので、余計文学離れに拍車がかかる。言葉を大事にしないこの付けは必ず来るだろう。イギリスでは文学が役立たないという議論自体が起こらない。ロンドン大学の英文学の講義で聞こえるのは先生の声と、学生が一生懸命ペンを走らせる音だけである。今年の夏オックスフォード大学で英文科の先生と話をする機会をいただいた。彼女はシェイクスピアが専門であるが、マキューアンの作品すべてを読んでいることに驚かされた。彼女からカリキュラムや試験問題等の資料をいただいたが、学生が3年間で読まなければいけない書物の量、超えなければいけない試験と論文のレベルの高さには正直圧倒された。自分の言葉で自分の考えを書く大切さ、人の書いた文章を緻密に読む大切さを学生に再び教えたいと思う今日この頃である。サザランド先生はマキューアンの文章を一体どう形容するのであろうか。今度お会いしたら是非聞いてみたい。